

KATE Journal

Kantokoshinetsu Association of Teachers of English

Vol. 32 March 2018

高校生は中学英語をどの程度使いこなせるか — 中学英語定着テスト間の相関とセンター試験との関連 —

関東甲信越英語教育学会 研究推進委員会

pp. 115-128

平成 30 年 3 月 第 32 号
関東甲信越英語教育学会

高校生は中学英語をどの程度使いこなせるか -中学英語定着テスト間の相関とセンター試験との関連-

To What Extent Do Japanese High School Students Acquire What They Have Learned in Junior High School?

関東甲信越英語教育学会 研究推進委員会

Abstract

In high school English education in Japan, teachers tend to focus on what to teach, and little attention is paid to how much of the language knowledge they have taught is actually acquired by their students. What is taught in junior high school is a basis of what students learn in high school. Unfortunately, however, little is known to what extent Japanese high school students acquire what they have learned in junior high school. This study is a follow-up study of Kanatani *et al.* (2017), which examined over 5000 Japanese high school students' acquisition of English which was learned in junior high school. Six Junior-High-School English (JHSE) tests including Rapid Reading, Listening, Dictation, Translation, and Picture Description tasks were administered to 77 Japanese high school students. The results of the JHSE tests were reported as well as the relationships among the tests and to the scores of the university entrance exam. The performance on the dictation task was significantly correlated with the other five tests most strongly, suggesting that the dictation task can most validly assess the English proficiency that is based on what is taught in junior high school. Furthermore, significant positive relationships were found between the JHSE test scores and the scores of the entrance exam. The dictation score predicted students' performance on the university entrance exam most strongly.

キーワード： 中学英語 基礎定着 高校生 大学入試

1. はじめに

本稿は、2017年8月26日、27日に新潟大学で行われた、関東甲信越英語教育学会第41回新潟研究大会の2日目に、委員会企画として研究推進委員会が発表した内容に、追加情報を加えて論文の形にまとめたものである。新潟研究大会の委員会企画のために、約1年間かけて研究推進委員会のメンバーが中心となって行ってきた研究の成果を、研究大会に参加することができなかった会員の皆様にも知っていただく機会を設けるため、そして、研究成果を論文の形にして残すことで、今後より多くの方々の授業実践や研究活動に役立てていただきたいという思いから、このたび、KATE Journalに寄稿

させていただくこととなった。

「高校生は中学で習った英語をどれだけ身に付けているのだろうか。どれだけ使いこなせているのだろうか。」この問いに対する答えを探ることが本研究の目的である。同じ目的で行われたより大規模な先行研究である金谷(2017)では、のべ5000人の高校生を対象に、6種類のテストを実施し、中学英語の定着状況を調べた。その結果の詳細は本稿では割愛するが、この研究で課題となったのは、各テストの受験者が異なっていた点である。そこで本研究では、同じ受験者(日本人高校生)に6種類すべてのテストを受けてもらうことで、より多角的に高校生の英語習熟度の実態を調べることを目指した。さらに、中学英語の定着度に影響を与える要因を探るために、高校生がどのくらい英語を学習したか(学習量)をアンケート調査した。このアンケート調査の結果を用いて、高校生の英語学習量と中学英語の定着度の関係を探った。そして、中学英語の定着度が大学入試(センター試験)の結果とどのような関係があるかを探索した。

2. 方法

2.1 目的

本研究は日本人高校生の英語の定着度合いの実態を調べることを目指し、具体的に以下の4つの目的を掲げた。

- (1) 日本人高校生が中学英語をどの程度使いこなせるかを、読む、聞く、書く、の3技能の観点から調査する。
- (2) 各テストの結果を比較することで、3技能の定着度合いの間にどのような関係性があるかを調べる。
- (3) 本研究で用いた各テストの結果と、大学入試の結果との間にどのような関係性があるかを調べる。
- (4) 高校1年次から高校3年次までの英語学習時間が、本研究で用いた各テストの結果および大学入試の結果とどのように関係しているかを調べる。

2.2 参加者

首都圏にある私立の中高一貫校の高校3年生77名に、6種類すべてのテストを、2017年の5月から6月にかけて受験してもらった。

2.3 テスト

金谷(2017)で用いられた6種類のテストと同一のものを、同一の実施手順で実施した。すべてのテストが、中学校の検定教科書および中学生向けの学習教材を出題範囲としており、各テストが15分以内に終わるように設計されていた。以下、それぞれのテストの概要を示す。詳細は金谷(2017)を参照されたい。

(1) Listening テスト

英文を一度だけ聞いて、その英文の内容に関する英語の質問(True or False 問題、以降、TF 問題)に答える形式で実施した。英文素材は、『NEW CROWN』(三省堂、平成17年発行)のリスニング活動(Book 1, DO IT LISTEN 4; Book 2, DO IT LISTEN 2; Book 3, Listen 1)を使用した。教科書付属のCDに収録されている音源をそのまま使用し、TF問題は独自に作成し、録音した。解答用紙にはTF問題

の英文は記載されていないので、参加者は音声を取り取って解答するよう指示された。Book 1 からの出題を STEP 1 (中 1 問題)、Book 2 からの出題を STEP 2 (中 2 問題)、Book 3 からの出題を STEP 3 (中 3 問題) とした。

(2) 速読テスト

中学校 3 年生の検定教科書『SUNSHINE English Course』(開隆堂, 平成 5 年発行) から 173 語の文章 (PROGRAM 2 Why Are Jeans Still Popular?) を読んでもらい、まずは読むのにかかった時間を記録させた。その後、英文を見ないで 5 問の TF 問題に解答してもらい、読むのにかかった時間と TF 問題の正答率を使って WPM(words per minute)を算出した¹⁾。

(3) Dictation テスト

このテストでは、以下に示すような①～④のタイプの英文を合計 18 問出題した。

- ①単文で短め (6～7 語) の英文
- ②単文で長め (9～10 語) の英文
- ③複文で短め (6～7 語) の英文
- ④複文で長め (9～10 語) の英文

①と②には、SV+前置詞句、SV+副詞句、SVO+前置詞句、SVO+副詞句などの構文が含まれ、③と④には、接続詞 after, because, if, when を使った英文と、関係代名詞節を含む英文が含まれていた。③や④のように長めの英文を正しく再生するためには、問題文の音声を丸暗記するだけでは対応できず、自分が持っている文法知識を使って英文の内容を再構築しなければならないため、中学英語の定着度合いを調べるのに適していると考えた。

テスト用の音声データが収録された CD には次のような指示が録音されていた。

これからディクテーションテストを始めます。問題は全部で 18 問です。それぞれの問題につき、英文が 2 回流れます。その後、電子音が 4 回聞こえますので、それが鳴り終わったら解答を書き始めて下さい。英文と電子音が流れている間は何も書いてはいけません。それぞれの問題の解答時間は 25 秒です。

この指示文を見てわかるように、このテストでは音声流れている間は英文を書き始めることができず、さらに、音声聞き終わった後に流れる 4 回の電子音が参加者を丸暗記に頼りにくくさせ、自分が持っている文法知識を使うことなしには英文を再生することができなくさせた。

採点の際には、Dictation テストが「書き取りテスト」ではなく「英文再生テスト」であることを考慮し、スペリングミスや、問題文に含まれる単語と同じ意味を持つ違う単語が使われている場合は減点対象とせず、「元の英文を完璧に再生できている」と評価した。また、冠詞、前置詞、所有格、時制のミスを含んだ解答については「元の英文をほぼ完璧に再生できている」とみなし、この 2 種類の評価を得た問題数が何問あるかによって、参加者の英文再生能力を測った。

(4) 和文英訳テスト

Dictation テストで使用した英文の中から、以下の①～③のタイプの英文を選択し、合計 10 問出題した。

- ①SVO の構造を含む基本的な単文 (主語の長さが異なる文を含む)

- ②後置修飾を含む名詞句の主語を含む英文
- ③従位接続詞を含む複文

採点の際には、模範解答に見合った解答を「正答」とし、構文や語彙が多少意図されているものと異なる場合でも、文法的に正確で和文の意味を的確に伝えられている答えは「正答」とした。また、スペリングミスについては減点対象としなかった。

(5) Picture Description テスト① (以降, PD1)

このテストでは、たくさんの人が町中で活動している様子が描かれた1枚の絵について、5分間で、できるだけ細かく英語で説明するよう指示を出した。題材の絵は、『選択用教材 ア・ラ・カルト③リスニング上巻』(学校図書)という中学生用の補助教材から抜粋した。絵の中の登場人物たちが行っている動作はどれも単純で、中学英語を使った基本的な英文で十分に表現ができるものであったが、動作を説明するために必要な語彙は、「語彙リスト」として念のために絵の下に提示した。

採点の際は、参加者が書いたすべての英文の中から、構造が正しい文(大まかな英語の構造・語順(SVO, SVC)に間違いがない文)の数を数えた。構造が正しいかどうかを評価する際には、意味理解に支障のない細かいエラー(冠詞の有無, 三単現のs, 前置詞など)は許容した。

(6) Picture Description テスト② (以降, PD2)

このテストでは、6コマ漫画に描かれているストーリーを、その漫画を見たことがない人に伝わるように英語で描写するよう指示を出した。まず参加者は両面刷りのテスト用紙の表面を見て、そこに描かれた6コマ漫画と、そのストーリーを説明した日本語の文章を読む。その後、用紙を裏返し、解答欄に6コマ漫画のストーリーを英語で表現する。制限時間は15分であった。

答えは、「物語のエッセンス(下記参照)」をどの程度説明できているかについて、2名の評価者がA~Dの基準(下記参照)に基づいて評価した。

【物語のエッセンス】

Nancy は John にスーツケースを取られた → みんなで John を追いかけた(けれど追いつけなかった) → (代わりに) 犬(Hana) が追いかけた → John が逮捕された(スーツケースを取り戻した)

【評価基準】

絵を見たことがない人の立場になって英文を読み、以下の評価をする。

- A: 物語のエッセンスをすべて説明できている
- B: 物語のエッセンスの半分程度を説明できている
- C: 物語のエッセンスをほとんど説明できていない
- D: 白紙

3.1 各テストの結果

(1) 速読テスト

表1と図1に速読テストの結果を示す。

表1 速読テスト結果

N	77
TF 問題平均正答数	3.97
平均 WPM	82.67 (SD : 31.47)
WPM 最大値	173
WPM 最小値	20.76

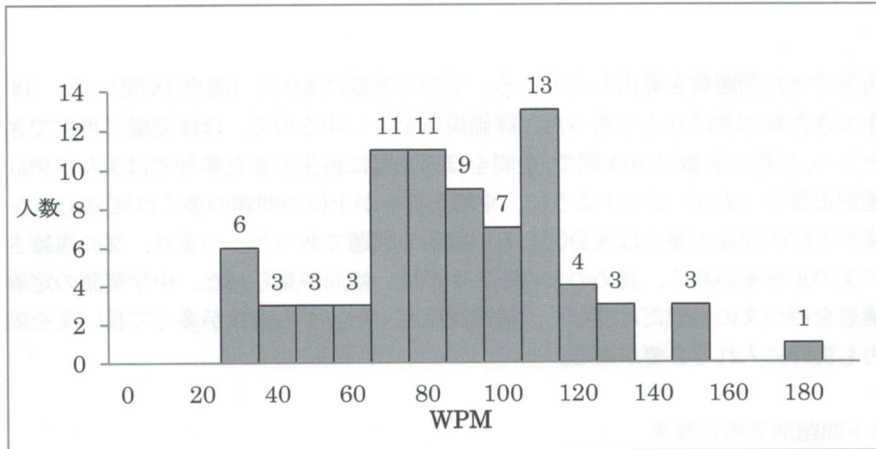


図1 速読テスト結果分布

今回の速読テストでは、TF 問題を解く際に英文を読み返すことはできないため、大学入試や資格試験等で課されるリーディングテストよりも負荷が高い読みが求められたと考えられるが、出題された英文が中学英語レベルであったことを考えると、今回のテスト形式のように負荷の高い状況であっても、ある程度のスピードで読めることが、基礎定着の指標となると考えられる。例えば、センター入試の英語(筆記)の問題をすべて時間内に解き終わるために必要な速度が100~130WPMという試算が出ているが(鈴木, 2017), 図1からもわかるように、WPMが100を超えている参加者は31名(40.26%), 130を超えている参加者は7名(9.09%)で、全体に占める割合としては決して大きいとは言えない。また、今回得られた平均83WPMという結果と、テストで用いた英文が中学レベルの文章であったことを考えると、読む力の基礎定着については、十分とは言えないであろう。

(2) Listening テスト

表2が示すように、Listening テストの結果、中1~中3レベルの英文の理解度はどれも7割程度で、学年による差は見られなかった。付属の問題がTF問題であったため、あてずっぽうに答えても50%の確率で正解できてしまうことから、今回の結果はそれより少し高い正答率ということで、中学英語を聞いて理解する力は十分に定着しているとは言えないであろう。

表2 Listening テスト結果

	平均正答率
中1 レベル	76%
中2 レベル	69%
中3 レベル	72%
全体	73%

(3) Dictation テスト

元の英文を完璧に再生できた問題数を算出したところ、平均正答数は8.0問（満点18問）で、18問すべてを完璧に再生できた参加者は0人であった。評価規準を少しゆるめて、ほぼ完璧に再生できた問題数を算出したところ、平均正答数は10.8問で、全問をほぼ完璧に再生できた参加者は3人(3.9%)であった。また、問題別正答率（表3）が示すように、平均正答率が上位の問題の多くは区分①あるいは③で、逆に正答率が下位の問題の多くは区分②あるいは④の問題であった。つまり、文の複雑さにかかわらず、短めの文の正答率が高く、長めの文の正答率が低い傾向が見られた。中学英語の定着を考える際、複雑な構造を持つ文の処理だけでなく、構造は単純であっても語数が多くて長い文を効率よく処理できる能力も視野に入れる必要がある。

表3 Dictation テスト問題別平均正答率

No.	問題文	区分	正答者数	正答率
3	I clean my room every day.	①	71	95.95
10	You may stay here if you like.	③	61	82.43
13	I'm teaching English at school now.	①	51	68.92
8	I slept because I was tired.	③	51	68.92
15	Yesterday we walked around the park.	①	49	66.22
11	He plays baseball when he is free.	③	36	48.65
4	My brother and sister went to America four years ago.	②	36	48.65
18	Every day Mary practices basketball after school.	①	34	45.95
5	The food my father cooked was good.	③	34	45.95
19	My son is always playing soccer in the park.	②	32	43.24
14	When I called my friend, he was watching TV.	④	30	40.54
6	She drinks coffee after she eats breakfast.	③	23	31.08
12	I like my brother because he is kind to others.	④	22	29.73

16	On summer vacation, Tom read many kinds of books.	②	15	20.27
20	The flower he gave me on my birthday was beautiful.	④	13	17.57
7	In the morning, my father takes a train to work.	②	12	16.22
17	After my son came home, I cooked a special dinner.	④	11	14.86
9	I want an expensive computer if I become rich.	④	8	10.81

(4) 和文英訳テスト

10問すべてに正解した参加者は0名で、9問正解者は1名であった。また、平均正答数は3.14問(SD: 2.2)であった。また、問題別正答率(表4)を見ると、もっとも正答率が高い問題でも平均正答率が56.4%で、図2からもわかるように、全体を通して和文英訳テストの結果は高得点とは言えなかった。

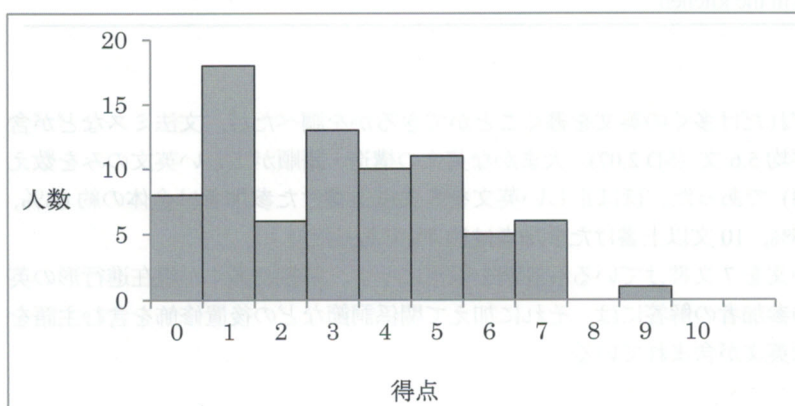


図2 和文英訳テスト結果分布

表4 和文英訳テスト問題別平均正答率

問題番号	問題文	正解者数	正答率
6	私は疲れていたもので、寝ました。 I slept because I was tired.	44	56.4
4	北海道に関するその本はとても面白い。 The book about Hokkaido is very interesting.	35	44.9
9	私が友達に電話した時、彼はテレビを見ていました。 When I called my friend, he was watching TV.	31	39.7
3	靴を買っている少女は私の妹です。 The girl buying shoes is my sister.	28	35.9

10	私の友達たちはいつも優しいです。 My friends are always kind.	27	34.6
2	この背の高い日本人の男性は、アメリカに住んでいます。 This tall Japanese man lives in America.	25	32.1
7	彼は暇な時に野球をします。 He plays baseball when he is free.	25	32.1
8	息子が返ってきた後に、私は特別な夕食を作りました。 After my son came home, I cooked a special dinner.	24	30.8
5	Ken に壊された時計は、贈り物でした。 The watch broken by Ken was a present.	21	26.9
1	あの赤いペンは、キッチンにありました。 That red pen was in the kitchen	19	24.4

(5) PD 1

このテストでは5分間でどれだけ多くの英文を書くことができるかを調べたが、文法ミスなどが含まれる英文も含めた場合は平均5.6文 (SD 2.07)、大まかな英文の構造・語順が正しい英文のみを数えた場合は平均4.6文 (SD 2.23) であった。ほぼ正しい英文を5文以上書けた参加者は全体の約68%、7文以上書けた参加者は約25%、10文以上書けた参加者は約4%であった。

解答例として、ほぼ正しい文を7文書けている解答例を以下に示す。解答の多くが現在進行形の英文で書かれていた中で、この参加者の解答には、それに加えて関係詞節などの後置修飾を含む主語を持つ英文など、構造上複雑な英文が含まれている。

解答例 (スペリングや文法の誤りは修正せずにそのまま掲載している)

The man is sleeping on the bench. The girl is eating an apple. The man is riding the bike.
The old woman who have an ummblera is walking. The old man is checking time. The woman is walking with thinking cloth. The man is singing the song.

(6) PD 2

2人の評価者の両方からAの評価を受けた(以降、A評価)参加者は全体の75%(59人)で、平均語数は73.4語 (SD : 18.0) であった。もっとも多い語数は139語(評価は両評価者ともにA)で、もっとも少ない語数は31語(評価は両評価者ともにB)であった。金谷(2017)では、PD2でA評価を受けた参加者数は全体の39%で、そのほとんどが偏差値65以上のいわゆる上位校の生徒であった。本研究に参加した参加者が通う高校も、同レベルの学校であったのと、対象学年が3年生であったことから、A評価を受けた参加者の割合が高くなったと考えられる。解答例として、A評価を受けた答案を以下に示す。この解答例はA評価を受けた答案の中でも、比較的ミスが少なく、物語の流れを正確に描写できているが、現在時制と過去時制の混同や、代名詞の使用があまり見られない点などは、他

の解答にも共通して見られる誤りであった。

A 評価を受けた答案例（スペリングや文法の誤りは修正せずにそのまま掲載している）

One day, there is a girl called Nancy. She went to the airport with her suitcase. At the airport, John a strange man was watching her suitcase, and the next moment he stole her suitcase and ran away. At the moment, Nancy was talking to staff, so she didn't realized that her suitcase was stolen. After realizing, Nancy and the staff ran after John, but they can't catch up with John. So they asked an old man and his dog Hana for help. At the next moment, Hana run after John, and she caught up with he. She bite him and he was arrested. Nancy's suitcase came back to her and she gave a kiss to Hana. (117 words)

3.2 テスト間の関係性

本研究で実施した6つのテストのうち、PD2を除く5つのテスト結果の相関係数を表5に示す。PD2は評価方法が他の5つのテストとは大きく異なったため、本分析では対象外とした。結果から、Dictationテストの結果と他のテスト（特にListeningテスト以外の3つのテスト）との間に中～高程度の有意な相関が見られた。本研究のDictationテストは、英文を聞いて情報を保持し、それを再生するという形式で行われたことから、ListeningやWritingといった技能との相関はある程度予想できたが、WPMとの相関が高かった（ $r = .600$ ）ことから、単文をある程度のスピードで処理できる能力が、Reading能力と関係があることが明らかになり、下支えとなっている可能性がうかがえた。また、中学英語の定着度を測る簡便な方法として、Dictationテストが有用であることも示唆された。

表5 テスト間の相関係数

	WPM	Listening	Dictation	和文英訳	PD1
WPM	-	.260*	.600**	.468**	.381**
Listening		-	.403**	.224*	.370**
Dictation			-	.691**	.625**
和文英訳				-	.606**
PD1					-

** $p < .01$ * $p < .05$

Note: PD1のスコアは「正しい英文」および「ほぼ正しい英文」の総語数を用いた。

3.3 中学英語定着テストの得点と英語学習時間はセンター試験の得点とどう関係しているか

中学英語の定着と、大学入試および高校1年次から高校3年次までの英語学習時間との間にどのような関係性があるのかを調べるために、以下の3つの観点から、追加分析を行った。

(1) 「本研究で実施したテスト（以降、基礎定着テスト）」と「センター試験」の関係

(2) 「高1から高3までの英語学習時間」と「基礎定着テスト」の関係

(3) 「高1から高3までの英語学習時間」と「センター試験の得点」の関係

まず(1)に関して、表6にあるように、本研究で行った5つのテストはすべてセンター試験の得点と有意な相関が見られた($p < .01$)。つまり、高3の5月～6月の時点での中学英語の定着度が、翌年の1月のセンター試験の得点と強い関係があることが示された。5つのテストのうち、センター入試の結果(自己採点)と最も相関が高かったのは Dictation テストであった($r = .760, p < .01$)。つまり、中学英語がしっかり定着していれば(特に Dictation テストで高得点)、大学入試(センター試験)で良い結果が得られる可能性が示唆された。

表6 各テストとセンター試験の相関係数

	筆記	リスニング	センター合計
WPM	.538**	.473**	.515**
Listening	.326**	.428**	.321**
PD1	.364**	.528**	.380**
和文英訳	.509**	.495**	.492**
Dictation	.721**	.822**	.760**

** $p < .01$

次に(2)に関しては、高3の学年末(2017年3月)に、高校1年次、2年次の英語学習に関するアンケートを実施し、その結果と基礎定着テストの結果にどのような関係性があるかを分析した。アンケートの質問文を以下に示す。

1. 学校の英語の授業のために予習と復習にあてた時間(週に_____時間くらい)
2. 塾や予備校での英語の授業+その予習と復習にあてた時間(週に_____時間くらい)
3. 1と2以外の方法で英語の学習にあてた時間(週に_____時間くらい)

分析の結果(表7)から、高3時点での基礎定着には、高1時点での学校の予復習が役立つ可能性がうかがえた($.197 < r < .449$)。特に、学校の予復習の時間数と和文英訳の得点に中程度の相関が見られた(高1: $r = .449$, 高2: $r = .406$)。一方で、塾・予備校の授業時間数・予復習に関しては、どの学年のデータも、高3時点での基礎定着テストとの相関は見られなかった。本研究の参加者たちの英語の授業を担当していた教員からの情報によると、予習として課していたのは、(1)新出単語の発音をCDを使ってチェックさせる、(2)本文を読み、わからない単語を調べさせる、(3)本文を読み、意味がすんなり頭に入ってこない文をチェックさせる(意味まで細かく調べる必要はない)、(4)パラグラフチャートシートを記入させる、そして余裕があれば、(5)本文音声でCDを使ってチェックさせる、という内容であった。また、復習としては、次の授業で行う本文の穴あきディクテーションの準備として、教科書本文の音読を課していた。このように教科書を中心とした予復習にしっかりと時間をかけることで、基礎定着を図ることができるのかもしれない。

表7 各テストと学習時間の相関係数

	高1			高2		
	学校予復習	塾授業+予復習	その他	学校予復習	塾授業+予復習	その他
WPM	.303**	.077	.124	.174	.121	.206
Listening	.197	.028	.113	.077	.021	.076
和文英訳	.449**	-.043	.113	.406**	-.094	.129
Dictation	.254*	-.029	.094	.095	-.005	.098
PD1	.264*	-.053	.170	.106	-.012	.109

* $p < .05$, ** $p < .01$

続いて(3)に関しては、表8が示すように、センター試験の筆記の得点と正の相関が見られたのは、高1、高2時点での学校の予復習の学習時間と、高3時点のその他(=受験勉強)の学習量のみで、センター試験のリスニングの得点と学習時間の間には有意な相関関係は見られなかった。また、塾・予備校の授業時間数・予復習については、学年にかかわらず、センター試験との相関は見られなかった。その理由としては、2つ考えられる。まず、塾へ通っていた生徒の人数がそもそも少なかった(高1:21名、高2:33名、高3:54名)ため、相関係数が低くなった可能性がある。2点目は、今回の参加者の授業担当者からの指摘により、学校の授業にしっかりとついていくことができない場合に塾で英語を勉強しても、基礎定着がそう簡単に図られることはないのではないかという点である。一般化は難しいが、今回の学校に限って言えば、特に高1の段階での学校の授業の予復習は少なからずセンター試験と関係していることが明らかになった。

表8 センター試験の結果と学習時間との相関係数

	高1			高2			高3		
	学校予復習	塾授業+予復習	その他	学校予復習	塾授業+予復習	その他	学校予復習	塾授業+予復習	その他
筆記	.225*	.038	.076	.212	-.059	.119	.096	-.208	.270*
リスニング	.169	-.161	.025	.106	-.081	.057	-.066	-.162	.171
合計	.223*	-.004	.068	.199	-.067	.111	.065	-.207	.260*

* $p < .05$

ここまで述べた追加分析の結果を図3にまとめて示す。図にあるように、高等学校における中学英語の定着(基礎定着)は、センター試験の得点とも強い関係があることが、本分析からわかった。そしてその基礎定着には、学校での日ごらの学習が下支えになる可能性がうかがえた。「高等学校におい

て中学英語の定着を」というメッセージは、一見、「レベルの低いこと」を訴えているかのように思われるかもしれないが、本研究で言う「中学英語の定着」とは、中学校の英語の教科書を読んで理解できるというレベルではなく、中学英語をある程度のスピードで自在に使いこなせることを指している。高校生になっても中学英語が十分に使いこなせるようになっていないわけではないということは、金谷(2017)でも本研究でも明らかになっている。中学校で学んだ内容を自在に使いこなせるようにさせるためには、英語を使う練習をたくさんしなければならないが、そのために必要な時間が、中学3年間では十分に確保されているとは言えないだろう。だからこそ、高校でも中学で学んだことを、さまざまな手立てで、しっかりと発展的に定着させる取り組みが必要だろう。

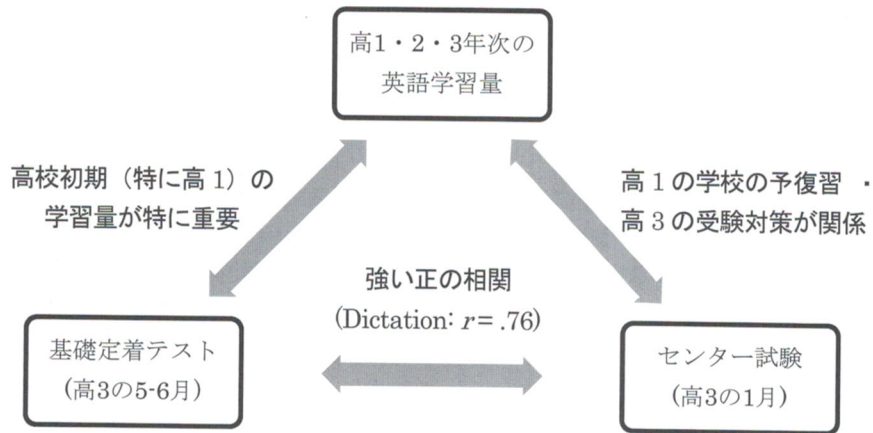


図3 基礎定着・学習時間・センター試験の関係図

4. 結びに変えて：中高の教員からの感想

本論文の結びに変えて、本研究で明らかになった内容について、中高の教員がどのように感じたかを紹介する。関東甲信越英語教育学会の研究推進委員会は、中高と大学の教員で構成されている。このセクションでは、中高で教壇に立っている委員会メンバーのコメントを紹介し、本研究から得られる教育的示唆を考察する。

《Listening テスト》

- ・正答率を見ると、全体で中学学習事項は73%程度聞き取ることができるということであるが、予想より低いイメージである。高3生であれば、正答率はもう少し高いものかと思った。
- ・授業内で、中学の教科書内容が聞き取れるようなリスニング活動を継続的に行わなければならないと感じた。高校では難しめのリーディング教材を、そのまま音声聞きとる練習に使うことが多いが、もう少し難易度の低い教材を使用し、平易な内容なものでも確実に聞き取れる練習をさせたい。

《Dictation テスト》

- ・結果から、生活の中で馴染みのある英文や語であれば、聞き取りやすいのではないかと思った。
- ・副詞句が文頭に来る文の正答率が低いことから、「英文は主語から始まる」と思い込んでいる生徒が

いる、もしくは、教師がそのように教え込んでしまっているかもしれない、と思った。自分の授業を振り返ると、英文解釈では、日本語と英語の大きな違いは主語と動詞の位置であると強調して生徒に伝えているが、副詞句の導入の際には、その位置を生徒に印象付けるようにしたいと思う。

- Dictation テストとその他のテストとの相関性が高いことは頷けるが、インプットの効果と、文法構成・語彙力などの知識のどちらが優先的に働いて、基礎定着につながるのか気になった。
 - Dictation テストがその他のテストとの相関が高いことから、Dictation ができるような英語力を身につけさせることが、総合的な英語力を培うことにつながる可能性が示唆されたと考える。また、Dictation テストは容易に実施することができるため、継続して指導することが期待されると思った。
- 《和文英訳》
- 和文英訳のエラー分析を見て、There 構文や後置修飾のような項目については、より明示的な指導が大切だと感じた。
 - Dictation テストと同様に、生活の中で馴染みのある英文や語であれば、解答しやすいのではないかと考えた。日常生活で使用頻度の高い語ほど、教えれば、語彙力の強化につながるのではないかと考えた。授業内で新出単語の導入の際に、なるべく学生生活と絡めて英文作成をさせるなどの単語の練習活動を可能な限り取り入れたいと思った。
 - どのような間違いが多かったのか、エラー分析などを見てみたいと思った。例えば、もっとも正答率の低い“That red pen was in the kitchen.”の誤答はおそらく、“There was a red pen in the kitchen.”のような解答ではないかと思うが、そうであったならば、there is/are の構文や前置詞句の用法についての理解を、指導する際に深めることが必要なのではないかと思った。

《Picture Description》

- このテストは少し難しく、普段の授業でも練習していないと書く気力もなかなかでないのではないかと考えた。反対に英語が得意な生徒には、楽しい問題であると思う。
- 日ごろから書く練習をさせていけば、このテストでももっとたくさん書けるようになるのだろうか。

《全体の感想》

高校生の中学英語の定着度の低さに驚いた。今まで、「中学の内容を理解している」ことを前提に授業をしていることが多かったが、このような前提が保証されない状態では、高校で新たに学ぶ内容が入りづらい。授業内で中学レベルの言語使用の場を設けたり、授業で学んだ内容の定着を目指した練習活動をさせたりしないと、次の段階へ進む際に、学んだ内容を取りこぼしてしまったり、英語への苦手意識を高める一方だと思った。自分の授業を振り返ると、時間数や内容をこなすことに追われ、練習活動が少なかったように思う。今後は高校で扱うリーディング教材よりも易しいスピーキング活動やライティング活動を取り入れて、単なる知識・不確かな知識を、使える知識に変え、まず中学英語を定着させていきたい。また、今回のテストは、それぞれ短時間でできるもので取り掛かりやすそうなので、授業内活動に継続して取り入れれば、中学英語の復習にも使えるのではないかと思った。今回のテスト結果を参考に、「高校入学時点で中学英語は定着している」という先入観を持たずに、基礎を定着させるための練習活動を取り入れながら、高校での新しい学習事項を導入・練習させたい。

以上のコメントから、本研究から得られる教育的示唆として第一に、「中学英語の定着」あるいは「基礎の定着」という言葉が持つイメージを、先生方がより具体的に、そして多角的に捉えることができ

るようになり、それが日々の指導の改善に役立つのではないかとということが挙げられる。第二に、基礎の定着を目指した具体的な指導法の提案が望まれるという点があり、これは今後の研究課題にもつながる。そして第三に、本研究で実施したような基礎定着テストの結果を、単に「どの程度できたか」「何点とれたか」という指標として使うのみでなく、誤答などに着目することにより、生徒の定着度合いや指導のヒントに関する情報を得る手段として活用できる可能性が示唆された。

中学英語を自在に使いこなせるようになるには時間がかかる。そして、基礎の定着なしには、高校以降の英語学習は積み上がっていかない。焦って新しい学習事項を生徒に与えるのではなく、まずはしっかりと土台を築くことが、大学入試およびそれ以降の英語学習の成功へとつながる近道であることを忘れてはいけない。

謝辞

本論文の KATE Journal への掲載についてご検討いただいた編集委員会の皆様と、掲載を許可してくださった運営委員会の皆様に、この場を借りて御礼申し上げたい。

注

$$^1 \text{ 算出式: } \text{WPM} = 173 \text{ 語} \div \frac{\text{かかった秒}}{60} \times \frac{\text{内容理解問題の正答数}}{5}$$

引用文献

- 金谷憲, 白倉美里, 大田悦子, 鈴木祐一, 隅田朗彦. (2017). 『高校生は中学英語を使いこなせるか? 基礎定着調査で見えた高校生の英語力』東京: アルク.
- 鈴木祐一. (2017). 「日本人高校生にはどれくらいの英文処理速度が必要か? —大学センター試験「英語」の分析から—」『神奈川大学言語研究』39. 1-20.

研究推進委員会メンバー (2018年1月現在)

委員長: 白倉美里 (東京学芸大学)

副委員長: 伊藤泰子 (神田外語大学)

委員 (五十音順):

井戸聖宏 (早稲田中学校・高等学校)

大關 晋 (日本大学附属第二中学校・高等学校)

加藤嘉津枝 (日本大学)

後上雅士 (早稲田中学校・高等学校)

駒形知彦 (埼玉県立与野高等学校)

鈴木祐一 (神奈川大学)

高木哲也 (東京家政大学附属女子中学校・高等学校)

田辺博史 (青山学院高等部)

富水美佳 (東洋大学京北中学高等学校)

矢部隆宜 (目白研心中学校・高等学校)